

うぶすな

茨木神社社報
発行所
茨木神社社務所
茨木市元町4-3
072(622)2346
<http://www.ibarakijinja.or.jp/>



切絵 比企義彦作

「亥」歳にちなんで

茨木神社宮司 岡市正規

本年は「亥」歳。十二支も一巡します。



他の十二支と同様に「亥」を「イ」と呼び「猪」を指しています。「亥」の本字は上字です。これを「孩」とみれば赤子のこと

で、人間・万物の萌芽と言え、「核」とみれば結実した種とも言えます。

「猪」の古い呼称に「亥子^{いご}」があります。今日でも「亥子祝」として陰暦十月上旬の亥の日の亥の刻に「亥子餅」を食べる風習があります。猪が多産であることから子宝に恵まれるということからの習わしです。

古くは「猪」と「豚」の区別はあまりはつきりとせず、野生のものが猪、豚は家畜で食料とされるものぐらいでした。そしていずれも貪欲な生き物とされてきたようです。貪欲無恥の心を指す「豕心」という表現がそのことをよく表しています。それにしても小利口な振る舞いに対して「猪口才」と言います。また、猪は、その向こう見ずの動作から「猪突猛進」という表現もなされます。

新しき明日の来る信ずと云う

自分の言葉に嘘はなけれど(啄木)

大神様の守護を願いつつもかわらぬ「まこと」の心をもつてご神意に添う生活を心掛けたいものです。

いづれからうぶすななまは千二百年

あまのいわとわけじんじや
茨木神社奥宮の天石門別神社は御鎮座千二百年を迎えます

当神社の元宮（現奥宮）石門別神社が大同年二年（八〇七年）にご鎮座になって本年で千二百年を迎えます。

天石門別神社は、坂上田村麻呂（※一）が平城天皇の御代大同二年この地（現在の宮元町）に荊切の里をつくった時、御鎮座されたと伝えられています。「大阪府全誌」にも「十三朝集」に「大同二年坂上田村麻呂茨木町を造り、神市を開きて農具を売買せしめしに起これりといふ」とあります。

※一 坂上田村麻呂 平安時代の

武將。征夷大將軍。桓武・平城・嵯峨の三天皇に仕え、正三位大納言に昇る。七八〇年京都に清水寺を建立。対蝦夷征伐に功あり、八〇四年には胆沢城（胆沢郡）を設け、鎮守府を多賀城から移転した。

平安時代中頃に編纂された「延

喜式」（※二）には嶋下郡十七座のひとつとして「天石門別神社」の名が記され、この地の人々のみならず朝廷の尊崇も篤かったことが伺えます。爾後、この地の一農村集落の氏神様として崇敬されてきました。建武年間（一一三〇年代）に、楠木正成公により村（茨木村）の西側に菅館が設けられます。菅館の主は、戦国時代に入り激しく交替しますが、御本殿改修の棟札が示すようにいづれの館主も当社に篤い尊崇を捧げてきました。

※二 延喜式 延喜五年（九〇五年）

醍醐天皇の命により藤原忠平らが編纂。延長五年（九二七年）完成。全五十巻。巻九・十が「神名帳」と呼ばれ、ここに記載された神社は式内社と言われるようになった。このあたりは当時、摂津国嶋下郡と呼ばれ式内社が十七座（十

三社）有り、そのうち茨木市内は十三座（十社）が鎮座されている。

元龜二年（一一五七年）白井河原の合戦で当時の館主茨木佐渡守が荒木村重に敗れます。その後、勝者である村重の子・荒木新五郎、続いて天正五年（一五七七年）には荒木氏の縁者中川清秀公が館主となります。天正三年（一五七五年）島津家久の伊勢參詣の折の記録に「西宮に上陸し瀨川を越えて宿河原に一泊した後、右手に茨木城を見て西国街道を進む」と記され、落城後この頃には天守を持つ城下町が造成されてきた様子がわかります。

この天守や堀を備えた城下町形成の過程で、それまでの農村集落であった茨木村も城下町の戦略の一翼に組み込まれ、天石門別神社も、現在地へ奉遷されたのでした。

献詠

（平成十八年新年の句）
火串会云



戌年の犬先立てて初詣

堀 恭子

子の担ぐ破魔矢の鈴の鳴りどおし

田原 憲治

会へる日を筆に誓ひて年賀状

岡田 晴江

どこからか風の吹き寄す除夜の鐘

小野 晶子

一門の明日へ風花舞ふ宮居

河辺さち子

小吉を引きしみくじに春を待つ

北川 三郎

臘梅の蕾も固し詣で道

北川 一志

年男千支門指して初詣

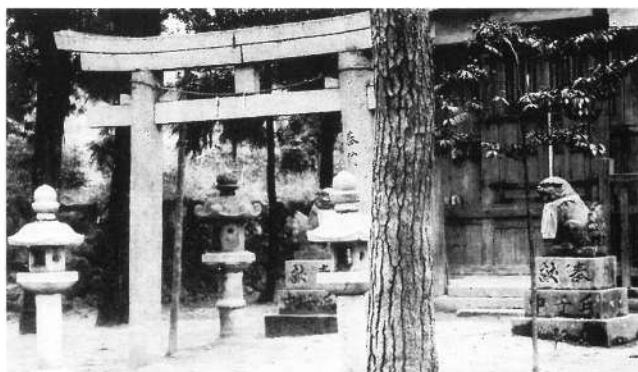
北川 睦子

青松の宮に日の丸初句会

倉垣刀美子



現社殿



改修前天石門別神社

中川清秀公も当社への崇敬の念篤く、当社への狼藉を厳しく禁止する禁制の高札を掲げるとともに、天正八年（一五八〇年）には神領十三石を寄進しました。

この時代、摂津名所図会（寛政十年・一七九八年 ※三）及び社伝によると高槻城主高山石近が、織田信長に倣い神社仏閣を焼却するに際し、信長が天照大御神、春日大神、八幡大神及び牛頭天皇（素盞鳴大神）の諸社は焼くべからずとしたので牛頭天皇を祀り焼却を免れたと伝えられています。

※三 摂津名所図会

摂津の国

の全域にわたる絵入りの案内書で寛政八年（一七九六）から同十年（一七九八）にかけて九卷十二冊が刊行された。名所旧跡・神社仏閣・世上の風俗・行事・その地域にまつわる説話などが掲載されている。

そして元和八年（一六二二年）牛頭天皇、春日大神そして八幡大神を祀る社殿を新たに築いて本殿とし天石門別神社を奥宮として今日に至っております。

記念事業

平成十九年（二〇〇七年）は、古代この処に天石門別神社が御鎮座されてより千二百年目の年にあたります。この間、先人達は大神様の御守護を希求して日々祈りを捧げ、感謝の誠を捧げてまいりました。千二百年の年にあたり本年秋に千二百年記念祭を斎行するとともに、先人達の営みと息吹に思いを馳せ、次のような記念事業を計画しております。

事業計画

- 本殿 瑞垣改修
 - 奥宮 神具新調
 - 境内社 天満宮
 - 主原神社
 - 多賀神社
 - 皇太神宮
 - 事平神社
 - 奉祝祭 平成十九年秋
- の改修



- 若水を手に闇の庭たどりけり 倉垣 政一
- 妻の遺影携へて行く初詣 高砂 正巳
- 元日の青空仰ぎ詣でけり 高橋 千雁
- 一触れにして勝独楽となりけり 竹中 丘
- 初鶏の四五羽放され神の庭 田中美佐子
- 幸福と気付く幸福月冴ゆる 谷本 房子
- 家族増え祈き事も増え初詣 寺村 杏子
- 火串誌の長寿を祝ふ明の春 西山えい子
- 二人して初日を拝す紀伊の海 橋本 祥子
- 商店街初売の声飛んでをり 林 曜子
- 明の春火串一門待つ慶事 武藤千代子
- かへり見る八十年や初詣 森脇甲子朗
- 思ひ切り無精になりて寝正月 八木 徹
- 早梅に師の句碑除幕待ちにけり 山田 国夫
- 初日の出日出づる国つつみたる 安村 昌禧

シリーズ神道 26

『お正月』



今日「正月」とは一月の月初めの三ヶ日を指す言葉ですが、かつては和訓で「むつき」と読みました。今では一般に「睦月」と表記します。それは、正月の期間が一年の最初の月で人は行き交い、親しみむつみあう、即ち「むつび月」から「むつき」と呼ばれるようになったと言われます。

本来、「お正月」は、「歳神様」を家々に迎えて祀り、五穀豊穣とその年一年間の健康と幸福を新しく授けてもらう日(期間)でした。人々は、家に「歳神様」を迎えるために数々の準備をします。まず家を掃き清め、家の門口・戸口に門松を置き注連縄を取り付け、そして「歳神様」をお祀りする神棚を設け、そこに鏡餅をお供えします。正月はまさにどの家々も「歳神様」をお祀りする神聖な場所となるのです。

大晦日になると氏神様に集まり

寝ずに歳神様をお迎えする「年籠り」の風習や、家にも元旦まで起き明かしたり、神社の境内や村の広場で大晦日の夜は火を焚き、正月中絶やさぬ地方もあります。このようにして年越しの夜は起きて、静かに歳神様を迎える風習は各地に残っています。寝ると白髪になるとか、しわがふえるとと言われるのも「年籠り」を守らせる禁忌でしょう。

神さまのおはなし ⑬

大国主神 その四

さて、大国主神が出雲の美保の岬にいらつしやる時にガガイモで造った船に乗って近づいてくる神さまがいました。そこで、その神さまに名を尋ねたが答えません。大国主神に従う神々に問うてもだれも知りませんでした。そこでヒキガエルが「これは、久延毘古がきつと知っているでしょう」と言うのでただちに呼んで尋ねました。久延毘古とは、今に言う山の田の案山子です。この神は、足で歩

最近では、午前零時をもって年が改まり初詣を行います。古くは一日の境は夜の始まる時刻とされ、一年のはじまりも大晦日の日暮れとされてきました。大晦日の夜は新年を迎えたお祝いの夜だったのです。

神社においての年初の行事は歳旦祭から始まります。宮中に於いて陛下が元日午前四時に神嘉殿という神殿前の庭上で「四方拝」、

は何でも知っている神です。その久延毘古は「これは、神産巢日神の御子、少毘古那神です」と答えました。

それで、大国主神が高天原の神産巢日神にお聞きになったところ「これは本当にわが子である。子の中で、私の手の指の間からくぐり抜けていった子だ。あなたと兄弟となつて、その国を作り堅めるであろう」と仰せられました。この時から、この二神は、一緒に国を作り堅めました。

そうして後に、この少名毘古那神は、常世国(海の彼方にあると考えられた国)へ渡つていかれました。大国主神は嘆いて「私一人

つまり神宮を始め全国の神社の遙拝の後、歳旦祭が斎行されます。これに倣い全国の神々の前で執り行われる神事が歳旦祭です。

ちなみに宮中では歳旦祭が終わつて「晴れの御膳」を召されます。私達の晴れの御膳が「お節料理」なのです。

このように日本の正月は神様と共に迎え、新たな生命を神様から授かる信仰に基づいています。

でどうやってうまくこの国を作ることができよう。どの神と一緒によくこの国を作るだろうか」と仰せになりました。

この時、海面を光り輝かせて近づいて来る神がいました。その神が「私をよく祀るならば一緒に国造りを完成させよう。そうしなれば完成するのは難しいだろう」と仰いました。大国主神は、「それなら、どのように祀ればよろしいですか」と聞いたところ、「私を、大和の青々と垣のように巡る東の山の上に祀り仕えよ」と答えられました。これは御諸山(三輪山)の上に鎮座されている神さまです。